

# 巻 頭 言

## 「まなびあい」という場の10年

コミュニティ福祉学会運営委員長

コミュニティ福祉学部学部長

三本松 政之

私は韓国でマイノリティ組織の調査を行っています。この夏にも調査に行ってきましたが、調査のアポイントをとる際に、担当者が忙しいので調査に協力できないという回答を複数の団体からいただきました。訪問先の団体が小規模の団体であり専従者も限られていて、対応に余裕がないということでした。研究者にとって研究対象となる現場（フィールド）について知ることが、重要であることはいうまでもありません。しかし、現場で実践活動をしている人々にとっては、調査のために大事な時間を取られるよりは、実践を優先させたいという思いが今回の反応にはあったといえます。このことは調査や研究が、現場での実践者からはあまり期待されていないということかもしれません。研究の成果がすぐに実践の場で役にたたないと思われていることもあるかもしれません。でも、現場と研究とがよい関係を持つことで、実践にとっても、研究にとっても気づきにつながるがあるように思います。実践の現場と研究者のよい関係はどのようにしたら成り立つのでしょうか。

このような気づきの場としてコミュニティ福祉学会「まなびあい」は創設されました。「まなびあい」がコミ福の卒業生と実践の場をつなぐしくみとして設立され10年がたちました。10回目の大会を迎えます。「まなびあい」は学部10周年事業の一環として企画され、2007年11月3日のIVYフェスタにあわせて設立総会がもたれ、翌年11月1日に第1回目の年次大会が開催されました。学部が発行していた「こみふくすてーしょん」というニューズレターの3号（2007年）は「コミュニティ福祉学会 設立準備特集号」です。当時の学部長・福山清蔵先生は「卒業生と学部との協同と連携の場として、卒業生から在學生に実践の中から湧き出たものを伝達できるシステムができた」と記しています。同じ「こみふくすてーしょん」で、設立準備委員だった浅井春夫先生が、卒業生の「みなさんがもう一度自らのとりくみを見つめなおしてみようという想いをフランクに語り合い、学びあう場を、学部創設10年を前に『立教大学コミュニティ福祉学会』（通称：学内学会）として設立することにいたしました」と設立趣旨を示し、「交流を通して、私たち教員も現場のみなさん

の研究を少しでも手助けし、さらに共同で研究できることができればと願っています」とその思いを記され、『学内学会』は、ガクナイガツカイではなく、『まなびあい』と呼ぶことにしてはどうでしょうか」と呼び掛けています。そこには「“コミ福らしい” = アットホームで、真摯に学びあい、人と人とがつながっていく学内学会にしていきたい」という思いが込められています。ところで、本冊子の「まなびあい」という個性的な表紙の題字は故・尾崎新先生によるものです。『まなびあい』の3号は尾崎先生の追悼号になってしまいました。

準備会では「コミ福学会」の主な活動として「研究大会の開催」「共同研究の推進」「学会冊子の発行」「ホームページなどの運営」が考えられていました。とくに研究大会については「一年に一度、母校で学んだ自分の専門分野や興味のある分野について、先生や先輩、友達と『まなびあい』『かながえあう』場です」と「まなびあい」の研究大会を位置づけています。

設立から10年目を迎え「まなびあい」はどのような場になっているのでしょうか。福祉の現場（フィールド）に限らず、広い意味での実践者としてさまざまな場で活躍している卒業生と現役学生、教員との出会いの場として、ときに卒業生のみならず、日々の実践を振り返る場になっていれればと思います。

設立総会での初代学部長・関正勝先生による記念講演「いのち・コミュニティ・ホスピタリティ—現代社会という書物をどう読むか—」の記録が『まなびあい』創刊号にあります。関先生は講演の最後に「働いている多くの卒業生たちは、自問自答して答えにならない答えを求め苦労していると思います。場合によっては、ほんとうに辞めてしまうというケースもあるでしょう。この学会というのは、先ほど『まなびあい』の場だというふうにおっしゃっていましたが、まさに『学び 会』の場として、相互に、バーンアウトしてしまわないためにここへ帰ってきて、学会へ帰ってきて、そして先生の研究に対しても問い掛ける。……だから、やっぱりみんなとの関係の中で問い返されるということを感じたときに、すでに問うてる人を励ましている、そういうふうな学会になっていったらいいなと願っております。」と語られています。「まなびあい」のさらなる発展を願いたいと思います。